学術集会関連

3rd World congress of Chronobiology に参加して

田原　優

早稲田大学　先進理工学研究科　電気・情報生命専攻　生理・薬理研究室　（柴田重信教授）
博士後期課程２年、学振特別研究員（DC2）

2011年５月、メキシコのプエブラで行われた国際時間生物会議に参加した。この学会は札幌で第１回、東京で第２回が過去に行われた事もあり、日本人のリズム研究者には馴染みの深い学会だと教えていただいた。なので、本間先生、近藤先生をはじめ日本人研究者が多数出席し、また各国からも多数のリズム研究者が集結した学会であった。学会のプログラムについてはHPを参照していただくとして、メキシコという国での学会、また若手研究者として望む国際学会、という立場から感じた事を報告させていただくとする。

まず。メキシコは2009年に豚インフルエンザが流行した国であり、インターネットで検索すると、「メキシコの治安の悪さ」を記述した書き込みは多数ヒットしてくるところである。今年の始めに柴田先生から、「今年はメキシコとイギリスで国際学会があるけど、君はどうする？」と聞かれた。危なそうなメキシコとヨーロッパ旅行の定番・イギリス。悩む。でもやっぱりメキシコでしょう。こんな機会が無いとメキシコには行けない。そしてなんといっても私は海外旅行が好きで、先日とうとうインドのガンジス川まで行ってきたバックパッカーであるわけで（まだ初心者かもしれませんが）。というわけで早々に学会参加を決め、ポスター発表に加え、さらに柴田先生のご厚意によりシンポジウムで発表する機会もいただけるという話になった。

メキシコへはヒューストン経由で丸一日かかった。プエブラに着いたのは夜だったが、街中は人通りも多く、なんと綺麗なヨーロッパ風の建物が並んでいた。確かに出発前に調べた情報だと、プエブラは街全体が世界遺産に指定されているという話であった。まさかメキシコがこんな街並とは思っていなかったので、平和な環境への安堵と共に、生きがってバックパックを背負って来ないでスーツケースをガラガラひいて来た自分にホッとした。そして結局、トイレもシャワーも食べ物もほとんど問題なく過ごせる街だった。初日にしてメキシコの方には色々とあらぬ疑いを持ってしまって本当に申し訳なく思ったのであった。

プエブラ市内の様子

学会前夜はGet Together partyがあり、由緒ある教会のような部屋（たしか大学のホール？）でセレモニーを行い、パーティーはワインが飲み放題であった。その後は部屋で柴田先生と発表練習をして、メキシコといえばテキーラでしょ、という事で軽く乾杯して次の日の健闘を祈った。

オープニングセレモニーの様子

本題のシンポジウムでの発表は初日の１番始め

に、Etienne Challetの座長のもと、３番手のMichael Menakerの次に最後の発表者として私が行った。シンポジウムの議題は「New insights in the circadian mechanisms regulating food anticipation.」で、私はインビボ・イメージングシステムを用いた末梢時計評価と末梢時計の食餌同調について発表した。発表は緊張のあまり、スライドを始終見たまま（つまり客席には目をいっさい向けず）だったが、なんとか無事に終了した。ここまではまあ予定通り。問題はやはり質疑応答でしょう。という事で事前に柴田先生には「もしもの時は」とお願いをしていましたが、その「もしもの時は」は最初の質問を聞きとれなかった際に、すぐこれだと判断し、助人として先生を前にお呼びしてしまった（恥ずかしい話ではあるが、将来こんな過去もあったと振り返るためにも事実を書かせて下さい）。よってその後は、質問が聞き取れなかった場合は先生に通訳を頼み、それに自分が英語で答えるという戦法で乗り切った。また時には先生が助言して下さった場面もあった。こんな発表は正直自分でも見た事はないが、後々考えるとあの場で分からない質問内容を何度も聞き返して時間をロスするよりは、聞いて下さった皆さんのためにも質疑応答の時間が有効に使えたのではないかと思う事にした。そして質問が沢山来たのも事実であった。シンポジウム終了後は何人もの先生やポスドクの方に発表良かったよと声をかけていただいた。また、最も話しかけられたのは外国人の同じ博士課程の人だった。発表内容はさておき、「初めての国際学会での口頭発表」をこの時期に経験出来たのは本当に幸せな事だと実感した。

さて、私の発表やポスターには多くのメキシコの方が質問しに来た。どうやらこの国際学会は末梢組織の体内時計について研究している方がかなり多いようだった。実際にシンポジウム21個中、私の基準ではあるが９個程が末梢組織の体内時計についてであった。また、私と同じ「食餌性リズム形成」についても口演・ポスター共にかなりの数が出ていた印象を受けた。メキシコではこの国際学会の大会長であるRaúl Aguilar-Roblerоや、Mario Caba、Ruud Buijs、Carolina Escobarらが食餌性リズム形成の研究をしており、メキシコの体内時計研究ではかなり主軸になっているように感じた。今後の体内時計研究の一般応用として、「食事」は光療法に並ぶほど発展して行って欲しいと私は考えている。世界中に「Chrono-nutrition（時間栄養学）」という言葉が浸透するよう、私も頑張っていきたいと思った。

上述のようにメキシコの方は私達をとても歓迎してくれた気がした。同じ年代の知り合いも沢山出来たし、何度か国際学会で一緒になった先生方には今回のシンポジウム発表でやっと顔を覚えてもらえた気がした。先日参加した「生物リズム若手研究者の集い2011」もそうだが、学会に参加する中で、日本全国、または世界中に同じフィールドの仲間（または研究を職業にしようとしている仲間）が出来るという事が一番のメリットであると私はいつも思う（もしかすると研究者はいつも孤独なのかもしれない）。もちろん自分の研究成果を発表出来る事、またその成果を他人に知ってもらう事、広める事、これが一番大事だとは思う。だが私のような若手研究者にとっては、その研究成果と共に、自分を知ってもらう事も同じくらい大事であると思う。幸いにも今年の10月からロサンゼルスのUCLA（Chris Colwell先生）に短期留学するプログラムに参加出来る事になった。Colwell先生もまた国際学会などで何度かお会いしていた事もあり、メキシコではあちらから声をかけていただけた。なんだかんだで研

メキシコ人研究者との記念撮影

お気に入りの１枚
『平尾さんとメキシコ人風石田先生との晩餐』

究の中心であるアメリカ。短期ではあるがガッツリ得るモノは得てきたいと思う。

最後にメキシコの食事をレポートしたい。メキシコと言えば、サルサ、タコス、テキーラと言う方が多いのではないでしょうか。確かにカフェやレストランにはたいてい大きな肉がグルグル回っていて、その肉を切り落としてパンやタコスに挟んで出てくる店ばっかりだった。というかほとんどがそういうお店で、メキシコ人は毎日これを食べているのかとも思った。しかし地球の歩き方に載っているようなおしゃれなレストランでは写真（右下）のような料理もあった。これは黒いソースがたっぷりかかったモーレと呼ばれる有名料理で、甘いよく分からない味で私は正直無理だった。だが写真（右）のメキシコ人風の石田先生は美味しく召し上がっておられた。インド人にもメキシコ人にも間違えられるという石田先生、そして平尾さん、写真の掲載を快く許可していただいてありがとうございました。

そして最後に、国際学会への参加、口頭発表の機会を与えて下さった柴田先生に改めて感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

第12回ヨーロッパ生物リズム学会学術大会（XII Congress of the European Biological Rhythms Society, Oxford UK, 20-26 August 2011）に参加して

和田　快

高知大学総合人間自然科学研究科黒潮圏総合科学専攻博士課程１年
高知大学環境生理学研究室所属

イギリスはオックスフォード大学で開催された、第12回ヨーロッパ生物リズム学会に参加した。会期は2011年８月20日から26日までの７日間で、日本時間生物学会とのジョイント開催であった。参加者の多くは欧米からであったが、南米や日本からの大学院生を含む研究者も参加していた。参加人数は250－300人であった。

初日やBANQUETのある日など一部を除いて、基本的な日程は、朝一番のPLENARY LECTURE（60分）、３人の招待講演者と３人のショートコミュニケーションスピーカーによる135分のシンポジウム、ランチを挟んで、同様のシンポジウムを午後にも行い、PLENARY LECTURE（60分）、ポスターセッション（60分）と続いた。７日間で７つのPLENARY LECTURE、19のシンポジウム、246のポスター発表があった。

主に質問紙を使った疫学的研究を進める１大学院生である私なので、このような場で学会印象記なるものを書く機会を得ていることに大変恐縮しているが、学会で感じたことや得られたものを中心に振り返ってみたい。

私ごとであるが、“国際学会”にはこれまで学部3回生のときにチェコ共和国で１回、修士課程のときに大阪で１回参加した経験がある。しかしチェコの方は地方大学がその地域・近隣諸国（主に旧東欧圏）を対象に開いた小規模なもので、言語はチェコ語と英語が６対４から７対３というものであった。一方、大阪の方は日本開催なので、当然あちらこちらに日本語が溢れているという状況であった。つまり周り中英語だらけという国際学会は今回が初めてだったのである。

21日から参加したのであるが、最初のPLENARY LECTURE、シンポジウムは、ほとんど断片的にしか内容を理解するにいたらず、ここまで聞こえないものかとショックを受けた。私のポスター発表がこの21日であったので、このような状態できちんと発表できるのだろうかと不安になったが、いざポスター会場に行ってみると、存外相手とコミュニケーションがとれ、拙いながらも説明ができた。また、想像していた以上に熱心に質問やアドバイスを投げかけてくださる方が多く、議論にすっかり熱中してしまった。実験デザインや比較対象など、すぐに活かすことのできるご意見は本当にありがたかった。

この経験から、自分の知っている単語の多い講演や、マイク越しでなく直の声ならば理解できる幅が広がることがわかり、次の日からアブストラクトを一読してから臨むようにした。そうすると少しばかりわかるようになり、例えば、哺乳動物の視交叉上